

小さな胸に刻まれた夜空の大輪は、
いつかきつと、故郷の夏の記憶になる…
今年の夏、ラストを飾る思い出を「ミズトモ」で。



ともしび
第4回 福智町 水と灯火の夕べ
日時 8月29日(土) 19時開会
会場 彦山川・中元寺川合流点河川敷
問 福智町役場 総務課 庶務係 ☎ 22-0555 (実行委員会主催)

町長日誌

▼昭和の時代が終わりを告げようとしていた頃、全国各地で「まちづくり」や「むらおこし」の取り組みが、競うように展開されてきた。その地域の伝統や出身の著名人に因んだものが主流であったが、まさに百花繚乱の様相を呈していたと言っても過言ではない程だった▼旧赤池町も、昭和63年に町制施行50周年を迎えたのを機に、童謡のまちの宣言を行い、童謡を通して町の活性化を図ろうとしてきた。「かもめの水兵さん」や「うれしいひなまつり」、「グッドバイ」等の作曲で知られている河村光陽先生が、上野出身ということに由来して始められたものである。以来20年余の時を積み重ねるうちに、金田・方城・赤池の3町が合併して、福智町誕生という大変大きな変化も生じているのだが…。この間、町民のみなさんの生活空間に、何とか童謡を根付かせたいとの思いから、試行錯誤が繰り返されてきたのは言うまでもないことである▼しかし、童謡や唱歌が、かつてのような輝きを放たなくなった世相と相俟って、現実では当初の目論見とかけ離れた状況になっている。メロディーはもちろんのこと、歌詞の持つ純粹さ、明るさ、そして何よりも温もりを感じさせる大らかさ(素朴さ)は、潤いを失いつつある現代社会には、絶対に必要な要素ではないかと思う▼ところで、大正時代に「赤い鳥」という童謡雑誌があった。「赤い鳥」は、児童文学に貢献したばかりでなく、新しい童謡の花を開かせ、子ども達の文化に大きな影響をもたらしている。この雑誌の創刊が大正7年7月1日であることから、日本童謡協会が、7月1日を「童謡の日」に制定し、童謡の復活を目指して積極的な活動を続けている▼隗より始めようではないが、福智町もその一翼を担うべく努力をしたいと思います。

浦田 弘二